

思わず納得！ 読者を引き込む、筆者の「技」を知ろう！ —「アップとルーズで伝える」(四年)—

山梨大学教職大学院准教授 茅野政徳 かやの まさのり

◆子どもが言葉に立ち止まるために

子どもは、言葉(本稿では、広く「表現」の意として用いる)に「立ち止まる」すべを知らない。そのため、表面的な内容理解に留まり、筆者が紡ぎ出した一言一言の意味や意図に思いをはせないことも多い。国語科学習は、そうした子どもが言葉に「立ち止まる」すべを身につけ、言葉の意味や使われ方に目を向ける力を育むためにある。では、「アップとルーズで伝える」という教材で「立ち止まる」べき言葉とは？ 読者を引き込み、納得を生み出す筆者の言葉の「技」として、次の四点を見出した。

- ① 画面(シーン)との対応を図る言葉
 - ② アップとルーズなどを対比する言葉
 - ③ まとめに隠された、対比の言葉
 - ④ 論を広げるキーワードと類比の言葉
- それぞれの言葉に立ち止まるように施した仕掛けや工夫を、簡単に述べてみたい。

◆単元計画(全8時間)

- 1 本文を読んで、画面(シーン)を想像したり、読者を画面へと誘う表現を捉えたりする。(第1・2時)
- 2 第一〜五段落を読み、「アップ」と「ルーズ」の対比を考える。(第3時)
- 3 第四・五段落を読み、アップとルーズの「分かれること」「分らないこと」の対比を考える。(第4時)
- 4 まとめの言葉(第六段落)や、論を広げる言葉(第七・八段落)について話し合う。(第5・6時)
- 5 筆者の説明のしかた(技)について考えを交流したり、実際のテレビ番組や新聞、雑誌などで文章の内容を確かめたりする。(第7・8時)

◆学習の実際

① 画面(シーン)との対応を図る言葉

② アップとルーズなどを対比する言葉

「アップ」と「ルーズ」「分かれること」と「分らないこと」という対比の観点を示し、本文に—線や—線を引いて次の点を確かめた(学習活動2・3)。

- ・ 第一・五段落はルーズ、第二・四段落はアップについて書かれている。
- ・ 第四・五段落の中は、「分かれること」と「分らないこと」でさらに分けられる。

③ まとめに隠された、対比の言葉

学習活動2・3で、「アップ」と「ルーズ」などの対比を考えてきた子どもたち。「このように」というつなぎ言葉から、第六段落が、それまでの内容をまとめていることに気づく。しかし、この段落には、読者の目線を変える筆者の巧みな言葉が隠されている。その言葉に目を向けるように授業者が作成した第六段落を提示し、「どちらがそれまでの内容にふさわしいまとめの段落か。」と問うた。

〈授業者が作成した第六段落〉

このように、アップとルーズには、それぞれ分かれることと分らないことがあります。そこで、テレビを見る時、受け手はアップとルーズのちがいをもとにして、うつされていない部分や伝わってこない様子を想像しながら見るのが大切です。

〈子どもの発言〉

- ・ 第五段落までは、「分かります」「分かりません」と書いてある。これは、テレビを見る人の立場だ。「伝えられる」「伝えられない」は、テレビ番組を作る人の立場の言葉だ。
- ・ 第六段落は、「このように」とそれまでの内容をまとめているように見えるけれど、まとながら対比の言葉を使って、目線を見る人から作る人へ変えていたんだ！
- ・ 筆者は、テレビ番組を作る人だから、題名を「伝える」にしたのかな。

第五段落までは、「分かる」や「分らない」など受け手の目線から書かれていた。しかし、第六段落は「伝えられる」と「伝えられない」という、伝え手の目線に変える筆者の巧みな対比の技が使われている。

④ 論を広げるキーワードと類比の言葉

第6時は、「なぜ、第六段落で『このように』とまとめているのに第七・八段落が必要なのか。」と学習課題を設定した。子どもからは、以下のような気づきが発表された。

- ・ これまではテレビの話だったけれど、第七段落には新聞が出てきて、第八段落には両方が出てくる。テレビと新聞の共通点を言いたかったのかな。
- ・ テレビでも新聞でも「目的」に合わせて

言葉に立ち止まるための工夫として、先に、第一・二・四・五段落の本文のみを配布した。子どもたちは、本文から、画面(シーン)の内容を想像したり、読者を画面へと誘う表現を捉えたりした。(学習活動1)

〈子どもの発言〉

- 第五段落の画面を想像する
 - ・ 勝ったチームが挨拶するシーンかな。
 - ・ きっとみんな笑顔で拍手しているよ。
 - ・ ルーズの画面だから一人一人の選手や観客のことはよくわからないみたい。
- *想像したあと、実際の画面を見つめる。
- 画面へと誘う表現を捉える
 - ・ 「見てみましょう。」と投げかけている。
 - ・ 「勝ったチームのおうえん席です。」など現在形の文末が多い。実況中継みたいな書き方だね。
 - ・ 画面を見たくなる言葉の「技」がいっぱい使われている！

アップとルーズを選ぶのは同じだと第七段落に書いてある。

- ・ 第八段落は、「受け手が知りたいこと」「送り手が伝えたいこと」と対比を出し、これまでの全てをまとめている。どちらの段落も必要なんだ！
- 説明的文章の筆者は、その道に精通している専門家である場合が多い。筆者は、読者に分かりやすく内容を伝え、納得してもらえようさまざまな言葉の「技」を用いる。それらの言葉に立ち止まり、目を輝かせて気づきを発表する子どもの姿が印象的であった。

◆言葉に立ち止まる読み手を育てる

写真や図と文章を対応させる、対比・類比という思考をする、段落の関係や意図を捉える、など本単元で身につけた言葉の力は、他教科の学習や実生活にも生きて働く。今後も、子どもが言葉に「立ち止まる」学習を創造し、立ち止まるおもしろさを実感してほしい。

この教材は、来年度から使用される令和二年版教科書では、第三段落に筆者の主張が一文加筆されるとともに、最終段落の分量が増え、伝え手の立場がより強調されている。付け加わった言葉に立ち止まり、筆者の改変の意図を探る活動もできるとワクワクしている。